

開館50周年を迎えた 飛鳥資料館

1 はじめに

飛鳥資料館は1975年3月に開館し、2025年3月に開館50周年を迎えた。飛鳥資料館では飛鳥地方の文化財の保存と活用をその役割として、地域に密着した展覧会をおこなってきた(図26)。飛鳥資料館は、文化財の展示施設として認知されてきた一方で、建物そのものには、これまであまり注目されてこなかった。

奈文研では、飛鳥資料館の本館および売札所の建物について、築50年を経過したことを契機に、国の登録有形文化財(建造物)に登録されるべく、その準備を進めてきた。2025年7月に、文化審議会は飛鳥資料館の本館および売札所を、登録有形文化財(建造物)として登録するよう文部科学大臣に答申した。本年秋頃の官報告示をもって、正式に登録有形文化財(建造物)となる。

飛鳥資料館が開館50周年を迎え、登録有形文化財(建造物)に登録されることを記念して、本稿ではその意匠の特徴や建物の来歴を今一度まとめておきたい。加えて、2025年度以降に企画しているイベント等についても告知をおこなうこととしたい。

2 建設の背景と竣工までの経過

建設当時の社会的背景 飛鳥時代の遺跡が数多く残り、1966年に古都保存法(古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法)による「古都」に指定されていた明日香村(奈良県高市郡)にも、高度経済成長による宅地開発の波が押し寄せた。住民の生活向上を図りながら、飛鳥地方の

表3 略年表

西暦(年・月)	来歴
1966	古都保存法により、明日香村が「古都」に指定される
1970・12	「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」閣議決定
1971・4	「国立飛鳥資料館(仮称)設置準備会議」設置。基本構想検討開始。
1971・9	基本設計を谷口吉郎に依頼
1972・春	基本設計完了
1972・5～8	事前発掘調査、石組暗渠遺構検出、設計変更
1973・2	設計変更案が設置準備会議にて決定される。建築工事起工
1974	外構基本設計完了
1974・3	本館竣工
1975・3	売札所・車庫、外構工事竣工、飛鳥資料館開館
1994	第二展示室棟等増築
2025・3	開館50周年

歴史的風土と文化財をいかに保存していくか、この保存と開発をめぐる「飛鳥保存問題」は全国的にも報道され、やがて政界にまで波及した。

そして、1970年12月に「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」の閣議決定へと至り、この閣議決定では、飛鳥地方の歴史的風土と文化財の保存・活用に資するための環境整備として、明日香村北部の大字奥山に歴史資料館を設置することが掲げられた。これを受けて整備計画が進められ、完成したのが飛鳥資料館である。

設計者の選定 飛鳥資料館の設置準備は文化庁の主導で進められ、1971年4月に学識経験者で構成される「国立飛鳥資料館(仮称)設置準備会議」を置き、施設の建



図26 現在の飛鳥資料館外観 南東から

設や展示内容を含む基本構想を検討した。委員には浅野清、内田祥哉、大屋富美雄、菅野誠、関野克、谷口吉郎の建築関係者に加え、奈文研所長、奈良県教育委員会委員、文化庁職員が参画した。

同年9月の会議の中で、飛鳥資料館の基本設計が谷口吉郎に依頼された（のちに外構計画も依頼）。選定理由は不明だが、東京国立博物館東洋館（1968年）や東京国立近代美術館（1969年）といった国立の博物館等を手がけてきた実績は少なからず影響したであろう。なお、当初は国の独立機関として設置される予定であったが、結果的には奈良国立文化財研究所（現・奈文研）の組織内に置かれ、現在に至る。

基本構想と基本設計 設置準備会議による基本構想では、「建物の設計に関して歴史的景観への配慮」、「現地形を大きく改変しないこと」、「建物を平屋として屋根に瓦を葺くこと」の3点が示された。谷口による基本構想を踏まえた設計原案では、谷地北側の敷地中央に資料館を建て、北棟と南棟は正方位に則った配置で設計された。また、平面計画では中間棟よりも北棟を西に、南棟を東に配置し、現状と比較すると左右反転した計画であった（図27）。1972年春には基本設計が完了し、すぐに実施設計が進められた。実施設計は建設省近畿地方建設局が務めた。

上の井手遺跡の発見と設計変更 しかしながら、敷地内の事前発掘調査で、敷地東半に7世紀中頃の石組暗渠遺構が発見された（上の井手遺跡）。この遺構を保存するため、当初設計から①本館を敷地北西隅に建てる、②平面計画を東西反転する、③本館の配置を東で北に振る、④敷地入口となる売札所は敷地東南部に建てる、以上4点の設計変更をおこなうことで問題解決に至った（図27）。

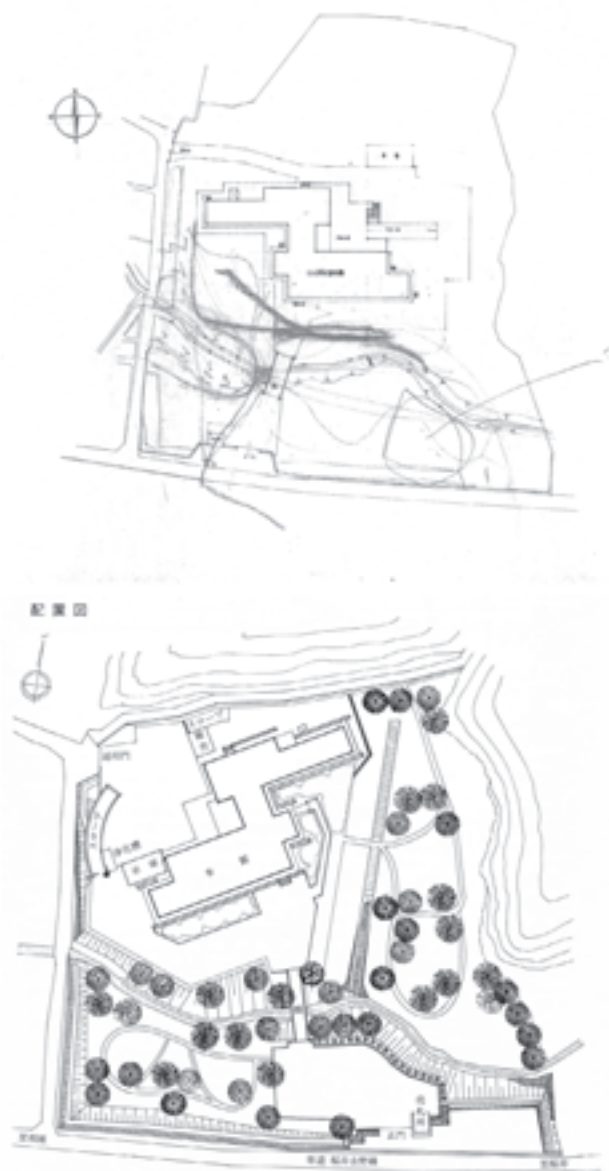


図27 当初設計配置図（上）と設計変更後の配置図（下）



図28 竣工当時の本館南正面

1973年2月に最終的な設計案が設置準備会議で決定され、建築工事が起工された。建築施工は村本建設が請け負い、展示設計および施工は日本エキシビション企画プロダクションが担当した。工事期間はおよそ1年間で、1974年3月に資料館の本館部分が竣工した(図28)。翌年3月には、車庫や売札所などの付属建物をはじめ、アプローチの橋梁や造園などの外構も竣工した。

3 竣工施設の概要と後世の増改築

敷地 近代的な施設の建設が歴史的景観を損なわないよう、飛鳥資料館の敷地は北と東を低い丘が囲む谷間に選定された。敷地は明日香村奥山が大半だが、一部は桜井市山田に位置する。敷地南方には古代の幹線道路である山田道(現県道15号桜井明日香野線)が位置し、敷地南半には深い谷を形成した戒外川^{かいげがわ}が西流する。

本館 飛鳥資料館は敷地北半の平坦地に建ち、建物は南の展示棟と北の管理棟、これらを繋ぐ中間棟から成る。全体の配置は真北に対して東で北に約26°振る。いずれの棟も地上1階・地下1階の鉄筋コンクリート造で、切妻造桟瓦葺とし、1階外周の正側面には高欄を備えた縁をまわす。

売札所 敷地南面の玄関口に建つ売札所は地上1階、鉄筋コンクリート造、切妻造桟瓦葺の南北棟建物で、西面に直交して鉄扉を設ける(図29)。売札所から資料館に至るアプローチでは、戒外川にプレキャスト桁の鉄骨コンクリート橋がかかる。

これら竣工当初の資料館諸施設は設置準備会議で定められた通り、現地形を尊重した配置となっている。



図29 現在の売札所外観 南西から

後世の増改築等 竣工後の増改築では、1982年に山田寺の東面回廊が倒壊したままの状態出土したことを受け、その出土建築部材を用いて復原展示するために、1994年に既存展示棟北側に新棟(地上1階・地下1階、鉄筋コンクリート造、桟瓦葺)を増築した。また、2007年度には現在の第一展示室内に特別展示室を増築し、2012年度には第一展示室およびロビー等を改修した。なお、展示室は当初自然光を取り入れていたが、展示内容のリニューアルにともない開口部内側を遮蔽し、現在は人工照明のみで管理している。売札所は竣工後まもなくの1977年度に北側にトイレが増設された。

4 建築的特徴と価値

外観の意匠構成 本館および売札所は地上1階で、本館の軒高は4.1m、棟高は8.0m、売札所は軒高2.3m、棟高4.3mとする。ともに飛鳥地方の景観や歴史的風土に配慮した高さを抑えた設計である。本館は桟瓦葺の大きな切妻造の屋根や堅格子のついた縦長窓が整然と並び、高欄を備えた濡縁が水平線を強調する(図28)。濡縁は南棟玄関正面で簡素な階段が取り付けながら、南棟の東側面から背後の中間棟・北棟へと雁行して続く(図30)。

こうした外観意匠は、明日香村の歴史的風土との調和のために、伝統的な日本建築の要素を取り入れた谷口らしいモダンデザインの造形である。遺構の発見にともなう設計変更を余儀なくされたものの、大きな変更点は配置や平面計画に関するものに留まり、内外の意匠は当初設計を引き継いでおり、谷口による当初の意匠計画に大きな変更はない。



図30 本館の雁行して続く濡縁 南から

後世の増改築についても谷口による開館当初の意匠造形が引き継がれている。本館の当初部分の改変は、主に内部に限られ、周辺環境と調和した外観の改修は、正面階段への手すりの設置等の軽微な変更にとまっている。

類例作品との比較 こうした外観の造形的特徴は谷口の他の作品にも見出せる。建物外周にめぐる簡素な濡縁とそれに接続する階段は、東宮御所（東京都港区、1960、現・仙洞御所）から用いられ、東京国立博物館東洋館においても濡縁の水平線が立面構成の重要なアクセントになっている。

良寛記念館（新潟県出雲崎町、1961・1964、国登録有形文化財）や乗泉寺八王子別院回向院（東京都八王子市、1971）とは立面構成が酷似する。濡縁の支持方法が東宮御所などは柱から出した梁で受けるが、良寛記念館は飛鳥資料館と同じく、縁のスラブ面のみを壁面から持ち出す方法をとる。東宮御所などの柱と梁の構造美を強調したデザインよりも、飛鳥資料館は歴史的風土との調和を目指して、良寛記念館などにみられるような、構造美よりも面の構成を強調した簡素な意匠を取り入れたといえよう。ほかにも谷口らしい造形として、展示室にみられる屋根形状を表した内部空間や、東宮御所の設計以来、繰り返し採用する六角形の照明器具がある。また本館妻壁上部にある棟木と組み合うガラリも、春日大社宝物殿（1973）のそれと類似する（図31）。

以上のように、飛鳥資料館と類似した意匠は、谷口の他の作品にも見出せる。しかしながら、飛鳥資料館の水平線を強調した瓦葺の切妻屋根は、その中でも秀でた特徴といえるだろう。展示棟と管理棟の位置関係、梁行長

さにあわせて変更される大小の屋根の重なりは、濡縁や縦長窓ともリズムカルに呼応し、建物を飛鳥地方の歴史的風土と景観にうまく溶け込ませている。鉄筋コンクリート造でありながらも和風な構成美を巧みに図り、谷口作品の系譜の中に位置づけられるものである。

飛鳥資料館の建築的価値 開館当初の建築である本館および売札所は、設置に至る歴史的経緯、建物配置、建築構造、意匠のいずれも、古都・飛鳥の歴史的風土に配慮しながら、周到な設計計画がなされたことが読み取れる。飛鳥地域の保存問題を発端として建設された施設であり、歴史的風土や文化財を保存し、それらを活用する役割を担うという歴史的意義を有する。そして、それから50年の歳月が経ち、飛鳥地方の文化財保護の歴史とともに歩んできた施設として、飛鳥地方の歴史的景観に大きく寄与する建物と考える。

5 まとめとお知らせ

飛鳥資料館では、開館50周年と登録有形文化財（建造物）への登録を記念して、2025年11月に記念式典および特別展を開催予定である。さらに、建物の魅力を伝えるガイドツアーやパンフレットの作成等も企画している。詳しくは奈文研および飛鳥資料館のホームページを参照されたい。

奈文研では、飛鳥資料館を今後も文化財等の展示施設として活用しながら、加えて、谷口吉郎作品を所有する他機関とも連携して、さらに建物の魅力を広く伝えていきたいと考えている。そして、飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存に取り組んでいく。（福嶋啓人）

図版出典・撮影者一覧

図27下・図28：パンフレット『奈良国立文化財研究所飛鳥資料館』（奈文研所蔵）から転載。

図27上：奈文研所蔵資料。

図26・29～31：栗山雅夫撮影（企画調整部写真室、2024年11月）。

参考文献

佐原 真・鈴木嘉吉「飛鳥資料館の建設」『年報 1974』44-45頁。
福嶋啓人・三宅拓也「再読 関西の建築 国立飛鳥資料館」『建築と社会』vol.99、No.1155、2018。



図31 本館展示棟妻面の意匠 北東から